平成 28 年 12 月号　№482

なかま

発　行
佐倉市立中央公民館
編　集
なかま編集委員会
〒285-0025
佐倉市鏑木町 198-3
電話（043）485-1801

津田梅子と花井お梅---------- 西崎　正夫
健康の話（その１）目の話------- 尾郷　徹哉
今年の登山山笑うふふ---------- 岩井　誠人
下町糸ちゃんいいたい放題２---- 岩井　糸子

薔薇

若岡　照秋

今年も、また12月が押しかけてきた。

「まだ来るのは早いよ！」と追返したくなる。本当に一年は、12ヵ月・３６５日あるの？　と疑いたくなる。私だけ、一年は３００日位しかないのでは、と思ってしまう。神さま、仏さま、どうか私だけ内緒で「５００日」にしてくださいと、こっそりお願いしてみよう。

そんな中、12月はバラの冬剪定に取り掛る。翌年、綺麗な花を咲かせるには、この作業が欠かせない。

我が家のバラは、全部「つるバラ」で、13箇所のアーチに絡ませてある。狭い場所でも、多く植えることができ、手入れも簡単である。

剪定は、一度全部解体し、葉っぱを全てむしりとった後、残す幹・枝を選択しアーチに誘引する。この作業には、結構手間が掛る。

園芸の本によると、幹・枝は水平に誘引すると書いてあるが、「草ぶえの丘バラ園」では、垂直に交差しないように誘引すると教わった。樹形の見栄えを美しくするためだそうだ。

我が家の庭は、広くないのでアーチの幅が狭くなり、交差する枝が出てくる。斜めに誘引すると花芽が付きやすいので、根元に近い枝は、交差させるようにしている。

私の自慢は、玄関前にパリの「凱旋門」をイメージして支柱を組んだアーチである。このアーチには「スカーレット・メイディランド」という赤色の小さな花が咲く修景バラを絡ませてある。

後日、壁を塗替える時、塗装会社の社長さんがこのアーチを見て「ご主人は橋梁会社にお勤めですか」と言われたが、その意味が解らず聞き返すと「よくできているから」と褒めてくださった。

この時期、私の手の甲はトゲの引っ掻き傷で汚い。「綺麗な花にはトゲがある」と言うが、トゲのないバラがあれば、とつくづく思う。

今年も10名余りの人が、バラを観に来てくださった。来年も、綺麗に咲いてくれることを祈って、丹精込めて剪定の作業に取り掛ろう。

春、美しく咲き揃った花を眺めながら、一服紫煙をくゆらす時、正に満ち足りた気分に浸る。無意識のうちに、二本目のタバコに火を付けている。至福のひと時である。

（編集委員）

津田梅子と花井お梅

先日、津田塾大学構内にある津田梅子のお墓に詣でた。そのひと月前に佐倉市内にある花井お梅のお墓にも詣でた。

津田梅子は日本の女子教育の先駆者として高名。記念切手にもなっている。また佐倉郷土の先駆者としても先ず初めに挙げられよう。

花井お梅は毒婦・悪女として蔑まれ、犯した殺人事件により16年の投獄の後、53歳で陋巷（ろうこう）に没した。

二人は共に旧佐倉藩士の娘で、年齢は同じで元治元年に生まれた。厳寒を侵して咲く梅の花。二人の両親は「この子には、香り高く、人に愛されて幸多かれ」と名付けたに違いない。しかし、二人の家族は明治維新に伴い武士の身分を失い失職した。

幸いにも津田梅子は6歳で米国へ留学。チャールズ・ランマン家で溢れる家族愛と最高の教育を受け11年後に帰国。

花井お梅は9歳の時、貧窮の中、口減らしのために売り払われた。売られた養家で芸者になるべく仕込まれ、15歳で芸者の置屋へと売られた。そして、身を売って独立し、待合である水月楼の女将となる。間もなく雇人である峯吉を殺してしまう。典型的な転落の構図であろう。

「孝子節婦」「良妻賢母」が社会正義であった時代。一連の「毒婦もの」がそうであったように、花井お梅も社会から指弾され、猟奇事件として弄ばれた。

佐倉ゆかりの人物である津田梅子と花井お梅の対比を通じ、差別された女性の歴史研究が、郷土史を学ぶ者の責務のように思われる。

フェミニズム・ジェンダー差別のない男女共同参画社会を築く上でも必要であろう。

（石川　西崎　正夫）

「今年（２０１６）の夏山　山笑う　ふふふふふふと　麓まで」

久しぶりに山を謳歌した。

50年前と同じ匂いが蘇る。

退職後の夢だった憧れの北海道。後輩が5年待てという。その5年が経ち、もう一人の後輩も加わり老人3人で北海道に向かった。

高校時代、新宿発、夜行列車で通った仲だ。厳冬期縦走を目標に年中通ったもんだ。

車に荷物満載し小樽港に降り立つ。道内の日本百名山九座と二百名山十座を目標に計画を立てた。

天候は下り坂、出だしから計画変更、北東が暫く持ちそうだ、北に向け出発。暑寒別岳と利尻岳を快晴のなか登る。朝露のなか花々が迎えてくれた。両山とも花の山で有名。這い松帯を抜け稜線に出るとやま、山、そして、山々…連なる山並み、絶景！これぞ北海道！眺望を満喫する。

これは褒美か？山の神に感謝。

北海道はデッカイドー、晴れている所に大移動し、数をこなした。しかし、地元でも初めてというほどの異常気象、高温多湿、ゲリラ豪雨、度重なる台風襲来。台風7号の発生を受け計画を中断する。

結果は百名山七座と二百名山二座の九座を登る。

山中のテント2泊、麓のキャンプ場13泊、素泊りの山小屋2泊、安宿3泊の20泊。

毎未明発ち、8～11時間の登山後、次のキャンプ地へ移動、洗濯・温泉・買い出し、食べて寝るだけ。睡眠6時間キープ。靴と体は限界だった。

星空になびくテント：
流れる風のうた：
懐かしい匂いが泳ぐ：

（稲荷台　岩井　誠人）

健康の話（その一）目の話

私の体験をお話して皆様の参考になればと思います。

私は日頃から新聞・ＴＶ・雑誌などからの情報を試しますが、そのなかで効果の出たものをお話します。話は二つで自分の体験と別の人の体験です。

私が目の調子が何か変だなと感じていた時、電車待ちのホームで何気なく片目ずつ瞑っていたら、右目で見た線路のレールがぎざぎざに折れ曲がっていた。驚いて眼科に行くと先生は、「この病気は治す薬も治療法もないです」と言いました。盲目になったらと思うと何も手に付かない状態でした。

そんな状態が数か月続いたある日、フランスの民間薬の記事を目にしました。それは〝赤ワインに玉ねぎを漬けて3日目から飲む〟と有りました。

早速作って飲み始めました。半年後別の病院に行くと「病気は停止して居ます、珍しいですね」と言われ、今は以前の三分の一位を予防のために飲んでいます。

今年の5月に知人から電話がありました。その人は加齢黄斑変性症を患っていて昼と夜がようやく判別出来るくらい病が進行していて、今は臼井の養護施設に居るとの知らせでした。

私が玉ねぎ漬けのワインを届けたのが5月20日でした。6月20日頃に伺った時、ＴＶの野球放送の前にいました。

「少し見えるよ。野手が球を追っているのが見えるが球は見えない」と言ったのでびっくりしました。

日常生活ができる様になればと思い、ワインを届けています。

（生谷　尾郷　徹哉）

下町糸ちゃん　いいたい放題パート２

今回も　ざっくりと

何がパート2だか、わからない方も　読んで頂ければ
公園の行ったり来たりです？

みーんなコピペ　今昔物語

あいみての
後の心に　くらぶれば
昔も今も　なーんも思わん

忍ぶれど
色に出にけり　卵焼き
塩と醤油を　間違えた

ちはやふる
上の句　下の句　ヒットした
あやかりたいな　映画の様に

人の振り見て　我身を直せ
人の振り見て　その振り直せ

目は口ほど　に物を言う

目が話したら　おお怖い！
来年の事を言うと
鬼が笑う
笑った鬼を　見た事ない

七転び　八起き
八つで起きなきゃ
こぶだらけ

聞くは一時の恥
聞かぬは一生の恥　と
いうけれど
一生　聞いて歩きそう

時は金なり
金はあっても　時買えず
（今　この時が大事です）

義を見てせざるは
勇なきなり
せざるが正解　このご時世
（そんな事　ありません）

何句でも　ひとりよがりは
すぐ出来て　雑句雑文
これにてチョン

（上座　岩井　糸子）

１２月の黒板

『なかま』の原稿を募集しています！

『なかま』の２ページと３ページは佐倉市民の皆さんから投稿いただいた記事を掲載しております。

『なかま』の原稿は、自由テーマを原則としています。**「出会いと別れ」、「旅の思い出」、「祭り」、「私のふるさと」、「私の健康法」**など何でも構いません。また、日常での出来事で発見したこと、気付いたこと、経験や感想などもご随意にお書きください。

原稿の字数は、650 字（13 字×50 行）以内です。また、掲載するにあたり常用漢字への変更や、句読点等修正させていただくことがあります。

問い合わせ先
佐倉市立中央公民館　TEL: 043-485-1801　FAX: 043-485-1803
〒285-0025 佐倉市鏑木町 198-3
E-mail: chuo-public@city.sakura.lg.jp
URL: http://www.city.sakura.lg.jp/soshiki/16-1-0-0-0_1.html

『なかま』は佐倉市民カレッジの学生と卒業生で構成される編集委員が編集し、市民カレッジ情報コースの卒業生が文字入力を行っています。

さくら道

歴史民俗博物館の玄関の前でやっているラジオ体操に参加する様になって、３年になる。震災の年の11月頃に始まったと聞いている。

朝10分間という短い時間だが、会場までは歩いて来る人がほとんどなので、それだけでもいい運動になっている。年齢は60歳代が多く、80歳を超えた方もいる。30人から50人位の数である。

春には桜の下を歩き、秋には紅葉を眺め、冬には、時として富士山が見られる。夏は朝早くは涼しく、気持ちいいが、冬は寒いし暗いし、我ながらよく続いていると思うこともある。

城址公園の近くに住んでいるという恵まれた環境に感謝し、健康な限り続けたいと思う。

（竹田　眞知子）

あとがき

佐倉市民ハイキングクラブで活動することになった。

総会で戴いた会則・運営要領等資料の中に、市民ハイキングの生い立ちが載っている。昭和46年頃、市役所内で職員の健康維持目的にハイキングを実施するようになった。昭和51年から中央公民館の『なかま』に史跡ハイキングを掲載した。以後、市民の参加募集、佐倉市民ハイキングが活動を始めた。平成11年市民カレッジ生のボランティア活動として始まり現在に至っている。

45年以上の時が過ぎ、多くの人たちから、受け継がれたかと感慨深く、引き締まる。

24期生は、ハイキングクラブ初めての女性班長を選出した。Ｙ班長は、統率力・先導力があり、適任である。Ｙ班長を盛り立て、熱く・強く・深くまとまってきている。

皆様の参加をお待ちしています。

（春日　良子）